



先

月、塾生五名で、と書いた落語教室生は、さらに増えて、現在九名になった。三年して一人も来なかったら諦めるつもりで始めたにしては、どう考えても出来過ぎだ。

落語家のもとで修行した経験皆無のぼくが指導しているのか、という根本的な疑問は、常に頭から離れることはないのだが、だれもそこを突いてこないのと、とりあえず柵上げにしている。仮に聞かれたら、小学校に四十年近く勤めて、それぞれの学年にどの程度要求できるかおおよそ見当が付くのと、営業に回るのが好きなのを言つて、見逃してもらおうつもりだ。

「何人まで受け入れるんですか？」

保護者に聞かれて、返答に困ってしまった。三人になったときに同じように聞かれて、松江の人口規模から言つて、落語教室に通いたい、通わせたいと思うような親子がいる確率はこんなもんだと思います、とデタラメを答えていたが、ひよつとすると確率はもう少し高いのかもしれない。どこで、もう無理、となるかはやってみないとわからないので、今はまだ入塾を断つたり、待機をお願いしたりは考えていない。

増えた理由はごく明快だ。先に入塾した子どもたちが実に楽しそうに落語をしているのを実演で、あるいは動画で見た子が、自分もしてみたくなったのであ

る。親戚で集まったり、家に客人が来たりしたとき、乞われるままに一席披露したりすると、こども落語の物珍しさも手伝つて、やんやの喝采を浴びるらしい。子ども自身、喜んでる人たちを見て悪い気がするはずがなく、どうやったらもつと喜んでもらえるか考える。好循環である。だから、人前で演じたな、というのは、ちよつと聞くとわかる。覚えたことを言つているのと、人に笑ってもらつた経験を含んでいるのと、声も顔つきも違つてくるのだ。

子どもたちが、お客さんを前に、嘸のおもしろさを伝えようとし、思つた通りに笑いが起きる、それは子どもたちとつて劇的なことなのに違いがない。見ず知らずの一回限りの出会いでも、感情が共有できることを肌で知るのだから。子どもたちが人前で話すごとに変わつていくのを見てみると、人間への信頼を蓄積していつてるのだなと思う。

でも、一方でこうも思うのだ。人と人の間に電子機器がなだれ込んでくるのを避けられない時代にあつて、じっくりと人の話を聞く、あるいは、聞いてもらう落語という器が、大人が考える以上に子どもには新鮮に見えるのではないか。落語をやつてみたい、高座に上がりたい、という子どもたちの欲求の中には、健康な飢えが潜んでいるのかもしれない。

空き家 7

木幡智恵美

これからの家④

少し前に点訳した本に、太古の昔、出雲と越（敦賀湾から津軽半島の一部まで）の人々との交流があつたことが記されていた。今回被災した珠洲市が昭和六十三年に美保関町（現在は松江市）と姉妹都市となつているのは、珠洲岬がくにびき神話で越から引つ張つて来たと言われている縁からだ。美保関の地名の由来となつたミホスミノカミは、越の国のヌナカワヒメと出雲大社に祀られているオオクニヌシノミコトとの間に生まれている。福井県の遺跡からは出雲特有の四隅突出型墳丘墓が発見されたり、能登では山陰系土器が出土したりもしている。出雲という字が付いた地名、オオクニヌシノミコトを祀る出雲神社等も越の国には多いとのこと。昔から、人々はその地に定住する人たちもいれば、文化や技術を広めるため、あるいは新たに開拓するため、違う土地へ移るといふことをしていたようだ。

そう考えると、律令国家では、貴族が国司などとして中央から地方に派遣され、民は防人として防衛の任のため九州などに遣わされた。武士の世では、領国争いに巻き込まれ、権力者によつて移封させられる事態になると、不毛の地へ移らねばならないこともあつた。家長制度の中にあつては、家に残るのは長男で、他の子どもたちは家を出なければならぬ。生まれた家はずつと住むことができるのは限られた人だつたのだ。

自分の身内だつてそうだ。九人兄弟の五番目に生まれた父は、戦後の混乱期には働き口がなくて転々とした末、結婚後の安定した生活のため、紡績業の盛んな大阪の泉南に向いた。借りていた長屋の住人には九州や山陰の出身者がたくさんいた。あのまま泉南に居て、出雲には帰らなかつたかもしれない。父の義兄であり朋友でもあつた伯父など、たまたま降り立つた尼崎で郷里の知り合いに会つたことがきっかけで職を得、そこが終の棲家になつた。

生まれ育つた家で最期を迎える人などほんの僅かで、様々なところに移り住む人が多いのかもしれない。松尾芭蕉の奥の細道の冒頭の言葉が浮かんでくる。「月日は百代の過客にして…船の上に生涯を浮かべ…日々旅にして、旅をすみかとする…」

30代フリーター イスラエルのガザ攻撃、ロシアのウクライナ侵略に共通しているのは、破壊し尽くし、殺し尽くすことを厭わない戦い方だ。9・11同時テロのあと、アフガニスタン、イラクを攻撃したアメリカなどの多国籍軍に比べる

と、一切の手加減を拒もうとする両国の強迫的なまでの徹底ぶりがきわだつ。年金生活者 その奥にあるのは、敵とみなした相手に対する過剰な恐怖心だ。殲滅し、皆殺しにしないと、いつまた攻撃されるか分からないという脅

えと言つていい。イスラエルの恐怖心は、20世紀にホロコーストに行き着いたユダヤ人迫害の長い歴史から生まれた。ロシアのそれは、13〜15世紀に「タタールのくびき」と呼ばれるモンゴル人による支配が続いて虐殺も経験したことがもたっている。

軍備の拡張も、その行使も、恐怖心から生まれるとしたら、他国に恐怖を与えないことが戦争を抑止する力になるはずだ。日本は戦後、その力を憲法9条によつて手にした。平和は戦争に

比べると、地味で目立たないので、そこには力など働いていないように見える。だが、イスラエルとロシアの振り舞い方を見れば、9条の力があなどれないことがわかる。

30代 中国の全国人民代表大会は、停滞する経済を立て直す新たな処方箋を示せないばかりか、「国家の安全」を理由に、自由な経済活動を規制する強権的な習近平体制を承認して終わった。それは政権がひそかに抱く恐怖の裏返しのように見える。

年金 習らが恐れる対象は外と内にそれぞれある。外にあるのは、経済的な締めつけを緩めようとせず、台湾有事には介入も辞さない構えをちらつかせるアメリカであり、内にあるのは、経済の停滞と自由の喪失に不満を募らせ、いつそれを噴出させるかわからない14億の人民だ。

そうした恐怖は中国の「帝国」としての長い歴史に根ざしている。「帝国」の歴代皇帝は常に周辺の諸族の侵入という外からの脅威と、国内の諸勢

力や民衆の反乱という内からの脅威にさらされ、それらと戦火を交えてもきた。それらが「易姓革命」と呼ばれる王朝の交代にもつながった。

中国共産党も例外ではない。彼らは外なる敵の大日本帝国と戦い、内なる敵の国民党と死闘を演じて国家の権力を手にした。それはいつまた内外の敵から武力によつて自らの権力を奪われるかもしれないという慢性的な恐怖を抱え込むことを意味した。

30代 その中国をアメリカは今いちばん恐れているように見える。

年金 経済と軍事を両輪にして世界の覇権を握つたアメリカは、経済と軍事によつてその覇権を中国に奪われることを恐れている。それを阻むために、この超大国が進めているのが、中国の経済力を輸出規制などによつて弱めることであり、その手法は「経済の武器化」と呼ばれている。「経済の武器化」とは先端的な半導体技術の輸出規制などを指し、国際政治学者の鈴木一人は次のように解説している。

《「経済の武器化」と言うとき、「武器」となるのは、国ではなく企業がつくり出したものです。つまり、半導体

技術などの知的財産や金融ネットワーク、クラウドのシステムなどで、米国は、自国の企業が頑張つて開発して生み出した技術や製品、国際競争力をい

わば乗っ取つて武器化し、輸出規制などに使っているわけです。

例えば、米国は2022年10月に先端半導体と半導体製造装置の中国への輸出を制限する規制措置を導入し、日本にも同じように規制するよう政府に要請してきました。日本には、半導体製造関連で高いシェアを誇るメーカーがたくさんあります。》(日経B O O Kプラス、2024年3月8日)

自らの権力の源泉であり、同時にその権力を脅かすもする経済と軍事とを一体化し、それを新たな武器として、中国に無血の戦争を仕掛けているのが現在のアメリカだ。

30代 流血の戦争はできないから。年金 背景に戦争のあり方の世界的

ニュース日記 915
中村 礼治

恐怖が誘う戦争

な変化がある。世界の戦争の「本流」は第2次世界大戦を最後に、破壊力を競い合う流血の戦争から、抑止力を競う無血の戦争に移った。その最初の世界戦争である東西冷戦でアメリカはソ連に勝利し、東側陣営を解体した。両

陣営は軍事的な抑止力では大きな差はなかつたが、経済力では西側陣営が圧倒的に勝つていて、その勝利は必然だった。経済力によるせめぎ合いのほうは放つておいても、おのずとソ連が負ける運命にあつた。

これに対し、改革開放で急速な資本主義化を達成した中国の経済力は、ソ連のそれをはるかに上回るレベルに達し、アメリカはソ連の場合のように放つておくことはできないと判断した。昔なら軍力で経済インフラなどを破壊する選択肢もあり得たが、無血の戦争が本流になった現在ではそれが難しいうえ、仮に実行できても、得るものより失うもの大きい。そこで編み出されたのが「経済の武器化」にほかならない。

30代 「経済の武器化」は、企業の自由な活動を制限し、市場を縮めるから、資本主義にとつては不都合なことのように見える。

年金 不都合を新たな利潤の源泉にして、延命するのが資本主義だ。